

リーディング・プラクティス①

Kちゃんの身変わり 手嶋英貴

自分の話を他人事のように言うのもおかしいが、幼少期の私は、まさに薄い氷の上を歩くような危なっかしい状況の中で生きていたと思う。生後一年経つか経たないかのうちに両親が離婚し、私は母方の伯母のもとへ預けられた。その後、母は結婚・離婚を二度くりかえし、そのつど、私は血のつながらない男の家に引き取られる。

しかし、この二人の元・義父はそろってロクデナシだった。浮気はするは借金を重ねるわ、おまけに毎晩酒を飲んで不機嫌になり暴れていた。今から思えば、私という連れ子がいたことも、家がギクシヤクする原因だったのだろう。結局、母の結婚は長く続かず、私はまた伯母のもとに送り返される羽目になるのだった。

こんな生い立ちを持つと、大抵の人はつい、親や世間を恨んだりするのもかもしれない。またそうした僻みが、失意や挫折の経験を招きよせて、その人をさらに不幸にすることもある。しかし私に関していえば、どういう訳か、そうした鬱屈に、全くゼロではないものの、ひどくさいなまれることはなかった。それには、ひとつ思い当たる訳がある。

実をいうと、私の中にはごく幼いころから、自分を「普通の人間ではない」と信じる気持ちがあった。それは、誰でもが持つ「自己愛」のたぐいより、たぶんずっと強固なものだ。そしてその確信が、大人たちのドタバタをよそに、子供の私を妙に悠然とさせていた気がするのである。

そのような感覚がなぜ自分の中にあっただのか、二十代までは考えたこともなかった。ところが三十歳を越えて長男が生まれ、その成長を眺めはじめた時、ある記憶が鮮明に蘇ってきた。——そうだ、子供時代の私は、いつも「Kちゃんの身代わり」だと言いつけられて育ってきたのだった。

私を預かってくれた伯母は、母より二十ほど年上だった。彼女も不遇な人で、若いころ一人息子に死なれ、その失意がもとで生まれ育った九州を飛び出し、わずかな財産を元に女手一つの小さな商売をしていた。伯母はたぶん、妹の子である私の中に、自分が失った男の子の面影を見つけていたのだろう。物心つくかつかないかの頃から、私によくこんな話をするのだった。

—— 妹のお腹にあんたができたとき、夢にKちゃん（というのが死んだ子の名前だった）が出てきてこう言ったんよ。「お母さん、こんど生まれてくる子は男の子だよ、ぼくが生きてやるはずだったことを身代わりになってやる子だよ。その証拠に自分の名前の一字がその子の名前に入るはずだ」って。私やびっくりしたけど、本当にそうならなあ、とも思ってたわ。でも、妹の子に、死んだ子の名前から一字付けよとは、いくら何でも言われんし、ずっと黙ってた。

ほんで、おまえが生まれたとき、妹らのつけた名前が「英貴」よ。結局Kの名前の字なんかどこにも入っとらんかった。まあ仕方ないと思って諦めとった。ほしたらじきにまたKの夢を見た。「お母さん、僕の名前はちゃんと入ってる」って言うんよ。おかしいねえ、と思いながら朝、仏壇に手を合わせよったら、Kちゃんのお位牌に書いてあるお戒名が目にとまった。それが「自照英賢善童子」っちゅうんよ。あれ、ちゃんと「英」の字が入ってるって、初めて気がついた。それからちゅうもの、あんたはKちゃんの身代わりなんやろうと思うとる。妹らが離婚して、あんたを預かることになったのも、そういう縁と思っとるんよ。——

伯母は、こんな話をするからと言って、亡き子の代わりに私を溺愛するようなことはなかった。時々彼女が繰り返すこの話を、私も淡々と聴いていた。あまりに幼かったから、話の内容もよく理解できずにいたのだ。しかし今、自身が親というものになって思い出してみると、この経験が自分に与えた影響の大きさに気づかないではいけない。

たとえ、それが伯母の幻想であったとしても、「Kちゃんの身代わり」というのは、いわば私にとって、自分の存在意義を確かに肯定してくれる「物語」だった。

——なにしろ、ぼくはKちゃんの身代わりとして、この世で何か（たぶん人にほめられるような「立派」なこと？）をやることになるらしい。とすれば、いまが多少恵まれない人生であっても、気にするほどのことはないじゃないか。いずれ嵐が去って行き、道が開けてくるのを、気長に待っていればいいのだ。——

というわけである。

ふつう、「何があっても大丈夫」と信じられるような安心感は、子供が親の温かな膝にのぼり、無条件の愛情を肌で感じることで育っていく。その経験は、子供が一生を通じて、常に自己を肯定し、前向きに生きていくための大切な原動力にもなる。だが、子供時代の私は、先に話した事情があって、親からそうした安心感をもらうチャンスがまず無かった。

ところが——人生の不思議さ・面白さはこういうところにあると思うのだが——伯母が変な夢を見て、その話を私に語って聞かせた、というたった一つの事実が、親の愛情の代わりとなって、私の「自己肯定感」の源になってくれていたのだ。話の真偽はどうあれ、結局あの「物語」を得ていたおかげで、私は何とか、不安定な少年期を乗り越えることが出来たのではないかと、今になって強く感じるのである。

この話は、いわゆる「スピリチュアル」な世界を肯定したり、賞賛するものではない。

ただ、上に述べたエピソードのように、お金でもなく、他者からの励ましでもなく、心の中にある「物語」だけが、辛うじて自己を支えてくれるケースが、私たちには時々あるのではないだろうか。

人生の中で何かの欠乏や不利を抱えていても、未来にそれが満たされると信じる人と、そう信じられない人とでは、気持ちも振舞いもだいぶ違う。それは、いま過ごしている日々を、ほかならぬ「自分のもの」として受け入れられているかどうか、の差でもあろう。私がいう「物語」とは、たまたま恵まれない一時期があったとしても、それを「自らの人生」としてしっかり歩み続けることを可能にする「価値転換」のシステムなのである。

自分が「Kちゃんの身代わり」だという話は、もちろん今は信じてはいない。ただ、その物語に出会ったことは、自分にとって、おそらく幸運だったのだろうとは思う。伯母は、八十を越えた今も私の生まれ故郷に暮らしている。ただし、私と長く離れてるうちに忘れてしまったらしく、時々顔を合わせても、あの夢の話はさっぱり口にしなくなった。